

言語における視覚的なものの問題

——ガダマーの「テオリア (theōria)」理解をめぐる理論と実践の諸相——

中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程2年

土方尚子

はじめに

古代ギリシアにまで遡るヨーロッパ思想の系譜には、視覚を「もっとも高貴な感覚」とみなす傾向がある——マーティン・ジェイは『うつむく眼』（1993）¹において、その冒頭にあたる章の表題にこのようなテーゼを掲げている。プラトンから近代にいたる思想における視覚の重要性についてはこれまでも多く論じられており、またそれにくわえて、言語そのもののうちにも視覚的な隠喩がひろく行きわたっている事実ともあわせて、視覚が歴史的に特権的な位置づけを与えられてきたのは周知のことだろう。これにたいしてジェイは、近代に隆盛をきわめた視覚中心主義が、現代のフランスを中心とした思想的状況においては反対に、視覚あるいは近代的な視覚の覇権的役割への強い反発が染みわたっているという。ジェイは自身の基本姿勢を、そうした現状によって視覚が棄却されるわけではなくむしろあらたな地平で再検討するべきであるとしたうえで、「視覚と言語のあいだには複雑ではあるが密接なかかわりがある」（DE, 8）と主張する。

またこのことに関連して、ジェイは『力のかたまり』（1993）²において、近代的な「視覚体制」の優位にたいする不信から言語への関心が高まった結果として、現代の解釈学の興隆と受容が展開することになったという指摘も行なっている。とはいえやはり、解釈学の言語中心主義的な言説にもなお視覚的なモチーフが残されているとし、そこでジェイはガダマーを引きながら、とりわけギリシア語「テオリア (theōria)」に起源をもつ「反映性 (specularity)」と呼びうる伝統がガダマーの言語理解のうちにもひそんでいることを看取した。

じっさいガダマーの『真理と方法』（1960）³には、芸術経験および言語経験をめぐる議

¹ Martin Jay, *Downcast Eyes: The Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought* (=DE), University of California Press, 1993. (マーティン・ジェイ『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜（新装版）』亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2024年）。

² Martin Jay, *Force Fields: Between Intellectual History and Cultural Critique* (=FF), Routledge, 1993 (マーティン・ジェイ『力のかたまり』今井道夫・吉田徹也・佐々木啓・富松保文訳、法政大学出版局、2024年、1996年）。

³ H.-G. Gadamer, *Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik* (1960), in: *Gesammelte Werke I*, Tübingen, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999. なお、今後本稿においてガダマーからの引用は、H.-G. Gadamer, *Gesammelte Werke*,

論のなかで、テオリア理解のもっとも基本的な洞察が提示されており、そこでテオリアは、芸術および言語の経験に本質的にかかわるものとして描出されている。反映性についてもまた、ガダマーの解釈学における普遍的媒体としての言語を支える思弁的性格として、その根幹に組みこまれているといえる。のちにガダマーは、こうしたテオリア理解と言語理解を踏まえつつ、それらを実践哲学としての解釈学という学問的構想のもと、実践（praxis）と理論（theorie）の関係からあらためて考察している。

たしかにガダマーの解釈学はあらゆる経験の根本を言語に定位する以上、そこに包摂される視覚的なモデルの有効性についてはいまだかならずしも自明ではない。そこで本発表では、マーティン・ジェイの「言語における視覚的なもの」をめぐる言説を手引きとしつつ（第1節）、ガダマー解釈学における「テオリア」および「反映性」の内実を確認し（第2節、第3節）、言語のうちで寄与するそれらのモチーフが解釈学的な実践の次元にまで展開される射程をたどることをつうじて（第4節）、ガダマーの解釈学的言語にたいして視覚的な契機がもつ意義を明らかにしていくことを試みる。

1. 解釈学的言語における視覚的契機——マーティン・ジェイを補助線として

本節ではまず、『力の場合』所収のマーティン・ジェイの論考「解釈学の興隆と視覚中心主義の危機」における記述を確認することをつうじて、ガダマーの解釈学的言語における視覚的なモチーフを見いだす手がかりを得ることにしよう。

ジェイによれば、近代における視覚の優位性は、三つの区分からなる視覚体制にもとづくとなっている。まずはじめにその主流をなしたのが「デカルト的遠近法主義」である。それは視覚芸術における遠近法と、哲学における主観的合理性というデカルト的発想の結びつきによって成り立ち、科学的世界観とも相応する支配的な視覚体制となった。のちにこのようなデカルト的遠近法主義への反発として、北方ルネサンスのオランダ芸術を典型とする「描写の芸術」や「アナモルフォースとファンタスムの眼」による「バロック的理性」といった視覚体制があらわれ、視覚の特権性をかたちづくってきたとされる。しかしこうした視覚中心主義にたいしては、20世紀にフランスを中心に思想的反動がひろがりを見せ、視覚の優位性にたいする反視覚的言説が募ってきた（Cf. FF, 100）。

ジェイの見立てによれば、現代の解釈学の興隆と受容に展開をもたらしたのは、視覚体制の危機をめぐるとりわけつぎの三つの要因にあった（FF, 108-109）。第一に、古代の光の理論における不可視的かつ幾何学的な「ルーメン（lumen）」および可視的かつ経験的な「ルクス（lux）」というモデル区分にもとづく認識論にたいする信頼の喪失⁴、第二に、ギリシ

Tübingen, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999.を用い、略号 GW のあとに巻・頁数を表記する。なお、訳出にかんしては既訳も参照したうえで、とくに断りのないかぎり訳は筆者によるものである。

⁴ ここでジェイは「ルーメン」「ルクス」という術語をヴァスコ・ロンチの『光学』から借用しているが、その意味内

ア的および観念論的理論にみられる「反映性 (specularity)」と呼びうる伝統から引き起こされた同一主義的哲学にたいする疑念、そして第三に、「バロック的視覚」によって生み出された倒錯と不安である。

ジェイがもちいる上述の術語「ルーメン」と「ルクス」はともにラテン語で光を意味するが、この区分は「精神の眼による理性的思弁 (speculation)」と「人間の眼による経験的観察 (observation)」を示唆するものであり、この二分法は両者の階層的関係をともなっていた (FF, 105)⁵。こうした光の二重の性質は、西洋における視覚中心主義の強さを支えていたが、一方を本質的なものとし、他方を二次的な見せかけとする階層関係の必然性が次第に疑わしいものとされたことが、視覚中心主義の危機の要因のひとつとなっている (FF, 106)。また、幾何学的な光学の秩序にもとづく規則性に反する「バロック的視覚」は、外部世界についての明晰な表象ではなく、複数の空間平面にイメージを過剰につめこむことで歪曲を生じさせる視覚的装置であり、眩惑や不安をともなうものであった (FF, 108)。

現代の反視覚中心主義的な言説にとっては、思弁的であれ経験的であれ、視覚モデルが認識論的な確実性の根拠となりうるかが問題視される。ジェイは、こうした思潮と20世紀における解釈学の展開に呼応をよみとっている。つまり、視覚をモデルとした認識形式よりも、解釈学はむしろ言語のうちに真理を探求することを求めてきた (FF, 106)。そこで言語は、もろもろの知覚とすでにしてつねに織り合わされており、あらゆる知覚は言語がみずからの重要性をあらたに再認識させる契機となっているのである。

ここでジェイが、言語を中心とする解釈学にとってのあたらしい視点として指摘したのが、先に挙げた視覚体制の三つの危機の第二の論点にあたる「反映性」という契機である。ジェイの解釈にしたがえば、反映性とは観察主体を再現する鏡の反射作用を意味している (Ibid.)。「反映 (speculation)」は、ギリシア語「theōria」のラテン語訳で「見る」や「注視する」を意味する「specio」という語に由来するが、とりわけ近代に入って、ヘーゲルによる同一性についての観念論的な理論のもとで、反映性という主題がもっとも顕著に見いだされるという (FF, 106-107)。ヘーゲルにおいては、主観と客観の弁証法的統一が絶対精神の反映 (speculum) にねざしている。その反映的思考のうちで視覚は、外的な対象をみる眼としてではなく、無限の反射において自身をみる眼という観点から理解され、弁証法的思考とほとんど同一視される (FF, 107)。本発表でも後述するように、ガダマーもまた『真理と方法』のなかで鏡像の反映関係をめぐるヘーゲルの議論に言及している。しかしジェイのみるところガダマーは、有限な人間の意識に立脚する解釈学的な反映的思考にとって、反省哲学の議論が有効であることを一面では認めながらも、観念論的な同一性の理論基盤にた

容はロンチとは異なるものである。その用法の差異については以下の論考を参照。佐藤勇一「視覚の狂気とイカロスの眼差し」『視覚と問文化性』加國尚志・亀井大輔編著法政大学出版局、2023年、210-212頁。

⁵ ジェイは、プラトン以来の「精神の眼による観照」(DE, 29)としてのルーメンが、「デカルト的遠近法主義」の視覚体制に結びつくものであったとしている (Cf. DE, 73)。

いしては批判的見地をとっていた。

とはいえ、ジェイがいみじくも指摘するように、ガダマーの解釈学において言語が示す対話的構造は、「聴覚の優位性が解釈学的現象の基盤である」(GW1, 466)と主張されていることから、視覚的なものが主題として前景化することはない(FF, 101)。ジェイによれば、視覚はみずから選択したものにまなざしを差し向ける主体による対象化を強調するのにたいして、聴くことは受容をうながす外的影響であり、語りかけられることとその応答という対話による間主観的な意味をもつとされてきた(FF, 103)⁶。これにたいしてジェイは、ある感覚のみを本質的なものと捉えるよりも、むしろそれらの多様で相互に矛盾しさえする可能性を相補的にひきだすほうがはるかに生産的であるという見解を示し(FF, 104)、そのうえで、ガダマーかんしても、地平融合という視覚的比喩の強調が視覚と音声の絡み合いに依拠するものであると指摘している(FF, 109)⁷。さらに、言語にねざす解釈学のうちにも、ヘーゲル的な同一性が切り崩されたかたちで、反映性という契機が潜在していることを認めうるという(FF, 110)。ジェイによればそれは、思考の運動そのものが徹頭徹尾、言語的性格をもっているというガダマーの主張において明らかとなるものであり、解釈学的な言語のうちにあるいわば「変容された反映性」は、言語を支える強さとして、より創造的な次元を示唆しているのである(FF, 111)。

本発表では次節以降、ジェイの指摘を手がかりとしつつ、解釈学的言語にかかわる「反映性」、そしてその語源として言及されていた「テオリア」の内実を、ガダマーの議論にそくして検討していこう。

2. 芸術経験と言語経験におけるテオリア——『真理と方法』における位置づけ

芸術経験の真理の意義を正当に評価することを『真理と方法』の芸術論の主導的な問いのひとつとしたガダマーにとって、近代美学における芸術の「ästhetisch (感性的・美的)」なものの含意は、作品を「純粹に美的な質」のみにもとづいて理解しようとする美的意識

⁶ 「見ることと聴くことの違いがわれわれにとって重要であるのは、すでにアリストテレスが認識していたように、聴覚の優位性が解釈学的現象の根底にあるからである」(GW1, 466)。ここでガダマーは、解釈学的経験における「帰属性(Zugehörigkeit)」の意味を問題とするさいに、「聴くこと(Hören)」のうちに含まれる弁証法について言及している。解釈学的経験の帰属性は、形而上学的な存在者の本質構造にたいする目的論的な関係としてではなく、解釈学的経験が言語の遂行様式をもち、伝承と解釈者のあいだに対話が行なわれているということから規定される。伝統のうちに帰属するということは、伝承の語りかけから自身に届くことにおのずと耳を傾けていることを示している。本発表では扱うことができなかったが、ジェイも指摘するように、ガダマーにおける聴覚の優位と視覚の相関性については今後問わなければならない課題であろう。

⁷ ガダマーの地平融合の概念が視覚的比喩であることについては、2023年に国内で刊行された論集『視覚と間文化性』にジェイ本人が寄せた序文においても、ふたたび強調されていることである。前掲書、32頁。

(ästhetischen Bewußtseins) によって徹底した主観化をたどったとされる。芸術作品がねざしている世界への現実的な連関を度外視するような美的な抽象作用を乗り越えるためにガダマーが導入したのが、「遊び (Spiel)」という芸術の存在様式である。あらゆる芸術形態に共通の根本性格として機能する遊びという現象は、遊んでいる者の意識や態度のなかに存在するのではなく、むしろ遊ぶ者を遊びの領域のなかにまきこむ中間的な出来事としてあらわれる (GW1, 115)。そのような遊びの特質は、上演芸術に代表されるように、意味をもった全体として作品存在そのものの同一性をたもちながらも、原理的に反復可能で多様なあらわれかたをする芸術作品においてその形態 (Gebilde) を完成させる (GW1, 116)。そのとき芸術作品の存在は、そのつどの歴史的地平において理念性と現象性が一体的に経験される「全面的な媒介 (Totale Vermittlung)」 (GW1, 125) として把握される。芸術作品における遊びの媒介作用においては、芸術の表現は制作者や表現者、そして鑑賞者とも本質的に結びついており、そのような解釈学的連続性こそが芸術に固有の時間理解をつくりあげている (GW1, 127)。

こうした芸術作品の存在にまつわる時間性格を、ガダマーは「同時性 (Gleichzeitigkeit)」という特徴で言い表している⁸。ガダマーによれば、同時性は「その場に臨むこと (Dabeisein)」の本質をなす (GW1, 132)。芸術作品の存在はたんに観る者の主観性が向けられる場ではなく、むしろ「その場に臨むこと」によって規定される。それは芸術の表現にただ立ち会っているという以上に、参与という様態として考えられる (GW1, 130)。ガダマーはまさにこの点に、テオリアの本来的な意義を見いだしている。

テオリアは、真に参与していることであり、行為ではない。それは、蒙ること (Erleiden; Pathos)、つまり見ることによって引き込まれ捉えられている状態である。 (Ibid.)

テオリアは主観的な美的意識の態度としては適切に把握されず、むしろ主体が目を凝らして見るものの側から捉えられる⁹。また、芸術の遊びに内属する鑑賞者のありかたを示すテ

⁸ この同時性は、美的意識の意味における「同時性 (Simultaneität)」とは異なるとされる。「Simultaneität」の場合、美的体験のさまざまな対象は意識のうちでそのどれもが同時的に均質に妥当するものになってしまうのにたいして、「Gleichzeitigkeit」は、表現されているものが唯一無二のものとして完全な現在性をともなっておりあらわれる。ガダマーはこの「Gleichzeitigkeit」という時間性を、キリストの救済の秘蹟をめぐるキルケゴールの議論を参照しつつ述べている (Vgl. GW1, 133)。

⁹ マーティン・ジェイもまた、主客の二元論をうみだす視覚の機能が西洋形而上学に特有のものとなっていたことにたいして、古代ギリシアにおける「理論 (theoria)」の意味に含まれるべつの可能性を示唆するにあたり、ガダマーのテオリア理解を参照している。Martin Jay, *Downcast Eyes: The Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought*, University of California Press, 1993, p.31 (マーティン・ジェイ『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜 (新装版)』亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2024年、29-30頁)。

オリアは、その場に臨むことによる自己忘却の性格をそなえているとされる。眼前の光景に忘我の境地で身をゆだねることが鑑賞者の本質であり、芸術の遊びに完全に没入することによる自己忘却は、純粋な参与のための積極的な可能性となっている¹⁰。芸術作品の存在の同時性を支えるテオリアによる参与の様態は、美的意識による芸術経験とは異なり、芸術作品の遊びの存在論的な媒介をつうじてはじめて歴史的に生起するものに出会うような、比類のない現在性を示すものなのである。

このように、芸術経験に見いだされるテオリアの意味は、第一義的にはその参加的側面が強調されるものである。このことは芸術作品の遊びの本質規定に結びつくものであったが、いっぽうでそれは、ガダマーが「世界経験の言語性」として語る言語のありかたにも通底している。

ガダマーの解釈学において、言語による世界経験は、言語にもたらされるというしかたで〈世界〉が開示される（GW1, 449f.）。それは、言語をつうじて世界にたいして態度をとることを意味し、世界をもつこと（Welt-haben）は同時に、言語をもつこと（Sprache-haben）であるともいわれる（GW1, 447）。ガダマーが射映（Abschattung）¹¹というはたらきから示す言語的世界観において、言語は、認識や言明の対象となりうるものやべつの言語的世界観のすべてをすでにして潜在的に包括している（GW1, 453f.）。そうした言語的な〈見方〉による世界観の多様性は、世界の相対化ないし排他的なパースペクティブをけっして意味せず、べつの世界観のなかへとわれわれの認識が拡大し展開しうる可能性となっている（GW1, 452）。ここで言語的に遂行される世界経験との根源的な関係によって明らかになるのは、言語固有の「事柄性（Sachlichkeit）」である（GW1, 449）。言語の事柄性にそくした世界経験は、自然科学的な認識のように主観的要素を排除して経験に客観性をもたらし対象化を意味していない（GW1, 457）。

ガダマーは、言語の事柄性と自然科学の対象的な認識が世界にたいしてもつ距離のこうした相違を、「理論（theorie）」の概念の内実から例示する（GW1, 458）。ガダマーによれば、近代科学において理論と呼ばれているものには、古代ギリシアにおいて「眺めること（観照）によって知ること」を意味したテオリア的態度はほとんど見いだせない。科学的な理論概念とテオリアのあいだには、認識の対象となるものを特定の目的のために適用するとい

¹⁰ ここでガダマーは、観る者は眼前に表現されているものとのいかなる実用的な目的をもった関与も拒絶され、絶対的な距離（Distanz）をとらされていると述べる。ガダマーはこの距離こそ本来的な美的距離であるという（GW1, 133）。この隔たりは、主観的な美的態度で芸術を鑑賞するためのものではなく、自分の眼前で表現されている事柄そのものに観る者が全面的に属した存在になることを可能にする距離とされる。

¹¹ この語はフッサール現象学における「射映（Abschattung）」にもとづく。ここでガダマーは、視点の違いによるさまざまな事物知覚の見方と、世界が経験する多様な言語的な見方の類比について語っている。しかし現象学的な知覚事物の見方は、ほかの見方から排他的に異なっており、さまざまな見方が互いに他方へと変化する連続性として統一的に構成されていくという点で、ガダマーの言語的世界観との特徴的な違いが残されているという（Vgl. GW1, 451f.）。

う実用的関心が克服されているという共通点があるにせよ、近代科学の理論的認識は経験を統一し支配するための構成的手段として捉えられる。それにたいして古代のテオリアは、手段ではなく目的そのものとして人間の最上のありかたを示しており、そこでは存在の秩序そのものが観照されるだけではなく秩序全体への参与も意味されていた（GW1, 458）¹²。

ガダマーのみるところ、テオリアと近代科学的な理論概念の差異は、そもそも言語的世界経験（*sprachliche Welterfahrung*）にたいする関係の相違に起因しているとされる（GW1, 459）。言語による世界経験は、事物的存在者（*Vorhandenheit*）を考量したり測定したりするのではなく、存在し意味をもつものとして現出する存在者が言語にもたらされるというしかたで把握される（GW1, 460）¹³。ガダマーは古代のテオリアにもまた、近代の自然科学を支配している合理的な構成とは異なり、事物的存在者ではなく事柄そのものを把握するはたらきがあったことを指摘している（*Ibid.*）。それは、世界を対象化する中立的な観察者のまなざしではなく、事柄への全面的な参与を可能にする経験である。このようにテオリアのうちには、芸術経験とならび、世界を言語にもたらすという事柄性にもとづいて遂行される言語的世界経験の範型もまた確認されるのである。

3. 言語における思弁的なもの——解釈学における「変容された反映性」をめぐる

解釈学的な言語に見いだされる視覚的なモチーフは、マーティン・ジェイにしたがえば、事柄への参与を示すテオリアとともに、「反映性（*specularity*）」という契機によっても見いだされる。本節では、言語の普遍的な媒介性を「思弁的なもの（*das Spekulative*）」として論じたガダマーの具体的な言及を確認していこう。

ガダマーは、解釈学的現象の決定的な基盤を人間の歴史的経験の有限性に見いだしており、このとき言語は、「言語という中間（*Mitte der Sprache*）」というありかたで世界経験にたいする媒介性を示している（GW1, 461）。言語は人間の有限性の痕跡（*Spur*）であるが、そこで展開されうる意味は言語のうちに無限にそなわっており、そのうちで形成される世界観全体との連関をもちながら、言語もまたみずからをたえず形成しつづけている（*Ibid.*）。

ガダマーによれば、「中間という言語」の世界経験への帰属性は、人間と世界、あるいは主観と客観の共属性をめぐる古代ギリシアに端を発しつつ、思考と存在の全面的な媒介の問題として、ギリシア的弁証法からヘーゲルにおける弁証法概念のうちに引き継がれてい

¹² Cf. Andrea Wilson Nightingale, *Spectacles of Truth in Classical Greek Philosophy: Theoria in its Cultural Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004, pp. 9-10.

¹³ 「事物的存在者（*Vorhandenheit*）」という概念は、言うまでもなくハイデガーからの参照である。ここでガダマーは、テオリアが事物的存在者よりはむしろ物（*Ding*）の尊厳を保持した事柄の把握をあらわしているとし、物の経験が事物的存在者のたんなる経験可能性とみなせないことを後期ハイデガーが強調していたことと引き合わせつつ言及している。

る（GW1, 464）。そこで弁証法という出来事は、思考によって完遂される運動ではなく、思考によって経験される事柄そのものの運動を示していた。思考することはまさに、事柄に含まれる固有の帰結を展開することであり、そのためには思考の一貫性にどこまでも付き従うことが必要となる¹⁴。テキスト理解においては、理解が向かうべき意味の全体が展開してくると、自身の先入見から意味予期として妥当するものを吟味し撤回しつつ解釈することをたえず反復する。解釈の運動が弁証法的であるのは、解釈の自己棄却をつうじて表現の一面性をべつの側面から補いながら、テキストの意味全体を有限な言語へともたらしようにするからである。伝承のなかで語られたことが言葉になるという解釈学的出来事は、事柄そのものの行為であり、それは近代科学的な対象化とは対照的に「蒙る（Erleiden）」という事態である（GW1, 469）。こうしたことからガダマーは、言語の出来事的性格（Geschehenscharakter）にもとづく解釈学的弁証法と、プラトンからヘーゲルにいたる形而上学的弁証法に共通する部分があるのを認め、それを「思弁的なもの（das *Spekulative*）」に求める（Ibid.）。

ガダマーは思弁的なものの意味を、ヘーゲルの用法に倣って鏡による反映の関係（das *Verhältnis des Spiegels*）から引き出している。

鏡像は、観察者という中間をつうじて光景そのものと本質的に結びついている。鏡像はそれじたいとしての存在をもたない。それはあくまでも見かけ（*Erscheinung*）のようなものであり、光景そのものではないが、とはいえ光景を鏡像として見えるようにさせている。それらは二重になっているようでありながらじっさいはひとつの存在にすぎない。（GW1, 470）

鏡像とそれを見る者との関係は、一方が他方に対する一方であり、他方は一方に対する他方であるという関係をとっており、その反映はたえざる交替のうちにある（Ibid.）。こうした鏡像の反映関係から照らし出される言語の思弁的構造を、ガダマーはヘーゲルの『精神現象学』序文における哲学的命題の論理分析による「思弁的命題」の構想に求めている。

ヘーゲルにおいて思弁的命題とは、表象的思考が依拠する論証的で形式的な命題論理を前提としつつも、これを乗り越えていく過程である。通常の命題では、主語という確固とし

¹⁴ プラトンは思考の弁証法的展開を、青年たちと師ソクラテスの対話で例示しているが、そこで弁証法は、一貫して問い続けることによって支配的な見解にたいする不適切なところを露呈させる対話の技法として描出されている。弁証法は、いっけん混乱を誘うような否定的見解さえも、事柄にそくした適切な眼差しをひらくものである。ガダマーによれば、ヘーゲル自身もまた、事柄にそくしたそれじたいの行為を弁証法的出来事として記述するためにプラトンを引いている。ヘーゲルにとって、「何であるかを知らないまま、対立する仮定から試みに結論を引き出す」力を獲得することこそ思考の経験であり、それゆえヘーゲルは純粋な思考が真理の体系的全体へ自己展開することとして概念規定したのである（Vgl. GW1, 469）。

た基体 (Subjekt) にたいして属性としての述語が付与されるが、これにたいしてヘーゲルは、哲学的命題を思弁的な運動において捉えなければならないとする¹⁵。ヘーゲルにとって思弁的な命題の重要性は、表象的思考が概念によって中断されるさいに思考自身が経験する「内的な阻害」の過程を、明確に表現する点にある (GW1, 471)¹⁶。「哲学的証明は命題の弁証法的運動の表現のなかで起こる。この運動は現実的に思弁的なもの (das wirkliche Spekulative) であり、この運動を言い表すことこそが思弁的表現である」 (Ibid.)。命題の一般形式に固定されない言明の作用、換言すれば、述語の形式において概念の一体性を表現することで主語の真理を言い表すような思考の運動を呈示したもののこそ、ヘーゲルが思弁的な命題と呼んだものにほかならない。

ガダマーの解釈にしたがえば、ヘーゲルは思弁的なものと弁証法的なものとのあいだに一定の区別を設けているが、それは『精神現象学』序文において強調されるのみであり、絶対知の立場からはもはやその区別が維持されていないところに、ガダマー自身の言語的な思弁性からは追認できない点を看取している (GW1, 472)。ガダマーは、ヘーゲルの弁証法 (Dialektik) やプラトンの対話術 (Dialektik) は、けっきょくのところ言語を「言明 (Aussage)」に従属させているという点で、言語的世界経験の次元には達しないという見立てを示すのである (GW1, 472)¹⁷。このことからガダマーは、ヘーゲル的な意味とは異なる方向で、言語のうちに思弁的なものを見いだしていく。つまり、意味の遂行 (Vollzug) としての、語りや了解、理解の出来事における思弁的な意味である (GW1, 473)。日常的な発話のきわめて有限な言語使用にも、そこに語られていない無限の創造的な意味連関が内包されている。「話す者は、その言葉が存在するものを模写するのではなく、存在全体との関係を言い表し言語

¹⁵ ガダマーが挙げている例によれば、「神は一者である」という命題は、一者であることが神の属性のひとつなのではなく、一者性であることが神の本質であることをあらわしている (GW1, 470)。

¹⁶ ここでガダマーはつぎのようにヘーゲルの言葉を引いている。「主語が根底にとどまりつづけているかのように、この主語から出発し、むしろ述語が実体であることによって、主語が述語に移行し、これによって主語が廃棄されるのである。そして、述語であるようにおもわれたものが、全体となり独立したかたまりとなることで、思考は自由に動きまわることができずに、この固まり [= 述語] の重みで押しとどめられるのである」。思弁的な命題は概念の一体性を表現するがゆえに、述語が主語にたいして行なう規定の関係は「反撃をこうむる」とされる (GW1, 470f.)。

¹⁷ 思弁的な命題に対するガダマーのこうした姿勢は「ヘーゲル論理学の理念」(1971)でさらに明確になる。この論文では、『真理と方法』では強調されていたヘーゲルの思弁的な命題とガダマーにおける思弁的なものとの違いが背景にしられている。またそのこととあわせて、ヘーゲルの思弁的な命題が、言語そのものの本質の解明にとって積極的な意義をもつことも示唆されている。「〈思弁的な命題〉はトートロジーと、ヘーゲルの意味での無限の規定における自己止揚との中間でありつづけるのであり、そこにヘーゲルの最高のアクチュアルな点が存在している。思弁的な命題は言明であるよりは、むしろ言語なのである」。Hans-Georg Gadamer, Die Idee der Hegelschen Logik, GW3, S. 83 (ハンス＝ゲオルク・ガダマー『ヘーゲルの弁証法』山口誠一・高山守訳、未来社、1990年、182頁)。

にもたらしめているという点で、思弁的なものである」(Ibid.)¹⁸。

ガダマーは、出来事としての言語の反映的な思弁的構造を「言語にいたること(Zursprachekommen)」という表現で強調し、解釈学的経験が真に思弁的なものであると主張する(GW1,474)。言語は、固定的な語義を指示するのではなく、そのつどの使用において意味があらたに生成しゆく中間である。「世界にたいする言語的態度の創造性が、すでに言語的に媒介された内容にたいしてあらたに適用され」ているのである(GW1,475)。テキストの解釈においては、理解の可能性の条件としての先入見を吟味しながら理解が進行していくが、このときテキストは異質の状態から習得されたもの(das Angeeignete)へと置き移される(GW1,476)。解釈をつうじて生じるそうした習得は、伝承されたテキストのたんなる追遂行ではなく、言語が媒介する事柄そのものの「見方(Ansicht)」の経験である(GW1,477)。解釈においてテキストが経験する同一でありながら異なるという逆説は、解釈がその言語的遂行ゆえに思弁的であるということを明らかにしているとガダマーは述べる(Ibid.)。そこでは、言語経験が思弁的な運動として、有限な表現において無限の意味連関を予示しながら、あらたな意味内容を形成していくからである。言語の反映的次元にたいするマーティン・ジェイの指摘が提起していたのは、解釈学的な言語経験は、ヘーゲル的な思弁的命題の鏡映関係のいわば「変容された反映性」として、それ以前にあったものよりもより豊かで発展した真理をうみだす契機となっているということであった¹⁹。ガダマーにおける言語の思弁的性格は、言語の有限性に徹することによってはじめて実現する創造性とその積極的な可能性を示しているのである。

4. テオリアと／のプラクシス——ガダマー解釈学におけるその展開

これまでみてきたように、ガダマーの解釈学において世界経験の媒介をになう言語のうちには、テオリアに見いだされるような参与の様態と、鏡像の反映性から示される思弁的構造にかかわる契機が指摘された。こうしたテオリアの理解を踏まえつつ、ガダマーはそれを、実践哲学としての解釈学という学問的構想のもと、実践(praxis)と理論(theorie)の関係のうちであらためて扱っている²⁰。

¹⁸ きわめて日常的な言語使用の遂行においても思弁的反映の本質的特徴が明らかになるが、それがもっとも顕著にあらわれるのが詩的言語であるとガダマーは指摘する。詩における言語的出来事が思弁的であるのは、すでに存在するものを単純に模写するのではなく、なじみのある日常的な言葉や語りを完全に解消し、詩的着想をイメージ化するなかでそのつど存在にたいする固有の関係を呈示しているからである(GW1,473f.)。

¹⁹ ガダマー解釈学における聴覚の優位性の議論にたいして、思弁的なものをめぐる鏡像の反映関係のうちに見いだされる視覚的なモチーフの重要性について指摘したものとして、以下を参照。David Liakos, *Hermeneutics and the Conservatism of Listening, Cosmos and History: The Journal of Natural and Social Philosophy*, vol. 16, no. 2, 2020, pp. 509-511.

²⁰ 古代ギリシアのテオリア概念を引き継いだガダマー解釈学において、理論と実践という観点がどのように展開されて

「実践哲学としての解釈学」（1972）²¹においてガダマーは、実践と理論がこんにちある種の対立のもとで規定されているということを問題にする。ガダマーによれば、理論という概念はこの場合、古代ギリシア的なテオリアの意味からおよそ変容してしまっている。すでに確認したとおり、その往古の意味は、神的な出来事の観照すること（*Schauen*）を意味し、その場に居合わせ真に参与することであった。この意味で古代の理論概念は、自己意識にもとづく理論的な態度が、存在するものを中立的に認識し対象的に観察するための隔たりを特徴づけているのとは異なっている。テオリアにおける隔たりとはむしろ、近さと共属性にねざした参与のための隔たりを示す²²。ところが近代科学的な学問は、われわれの世界経験の全体を度外視した「孤立化する探求によって支配可能な諸連関の認識」として展開され、それにより理論もまた、真理を探求しあらたな認識を獲得するための道具的な概念となったのである²³。こうした転換にともない、現代ではもっぱら、実践は近代的な理論概念の本質に適った実用的な応用（*Anwendung*）として理解されている（GW4, 217）。

このように現代において実践は、理論および学問の応用として捉えられているが、この語に含まれる根源的な意味は理論との対立によって、そしてまた理論の応用として規定されるのではない²⁴。こうした見解にもとづいてガダマーは、アリストテレスの『政治学』における言葉を引きながら²⁵、みずから「テオリアはそれ自身、ある種のプラクシスである」と述べる（VZW, 80）。むろん、アリストテレスの諸学の区分のうちにはテオリアとプラクシスの対立が存在することをガダマーも認めているが、アリストテレスのいう実践哲学が意味するのは、自然学や神学、形而上学を包括した理論哲学と対立させられる場合であり、それは普遍的な意味での知のことが考えられている（VZW, 78）。こうした背景に照らすと、理論と実践の古典的な構図は、知のありかたひとつの対立であって、学問とその応用との対

いるかを、ガダマーの芸術にかんする諸論考を介して詳述しているものとして以下を参照。Cf. William Konchak, *Gadamer's "Practice" of Theoria*, *Epoché: A Journal for the History of Philosophy*; 24 (2), 2020, pp. 453-465.

²¹ Hans-Georg Gadamer, *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft* (=VZW), Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag, 1991 (Dritte Aufgabe), S. 78-109（本間謙二・座小田豊訳『科学の時代における理性』法政大学出版局、1988年、73-103頁）。

²² Vgl. *Ibid.* S. 28（前掲書、21頁）。なおテオリアにおける「隔たり」および「距離」にかんしては、本稿註10を参照のこと。

²³ Hans-Georg Gadamer, *Was ist Praxis? Die Bedingungen gesellschaftlicher Vernunft*, GW4, S. 217（前掲書、49頁）。

²⁴ 実践にかんする人間の意識がその出発点においていかなるものであったかについて、ガダマーは「理論、技術、実践」（1972）のなかでつぎのようにも言及している。「それはわれわれが「理論的（*theoretisch*）」と呼ぶ人間行為のあの可能性によって特徴づけられる。それが人間的「実践（*Praxis*）」の根本性質なのである」。Hans-Georg Gadamer, *Theorie, Technik, Praxis*, GW4, 255.

²⁵ 「われわれは、それがもつ理論的な（*gedenklich*）はたらきによってのみ決定されるようなものを、最高の程度において「行為的」と名づける」（VZW, 80）。

立関係ではなかったとされる²⁶。

ガダマーは、理論との対立からは把握しえない実践の意味を、『ニコマコス倫理学』における「プロアイレシス (prohairesis)」の概念に依拠することによって特筆している。アリストテレスにとって実践は、そのもっとも普遍的な意味においては、生あるものの行動様式をあらわしている。それは、生あるもの全般の遂行 (energeia) を意味し、「生 (Leben)」、生活様式、あるしかたで営まれる生命 (bios) といったものが対応する (VZW, 81)。ガダマーによれば、アリストテレスのこうした広義の実践が人間に固有な実践の意義を示すとき重要となるのが、「プロアイレシス」という概念である。先行的選択を意味するプロアイレシスは、さまざまな可能性のなかで自覚的に自由な選択にもとづいて活動する人間に特異な性質とされる。生来の本能的な行動様式にしたがう動物とは異なり、人間の自由な決断は、生き方を導く優先的秩序にしたがってなされる。それは各々の状況において異なるしかたであらわれるいわばビオスのプロアイレシスとして、人間固有の実践とみなすことができる (Ibid.)。ガダマーはここに、知と選択に依拠する人間の卓越性があらわれると述べる。

ガダマーは、実践概念が示すこうした意味領域のひろさを汲みながら、アリストテレスにおける実践概念は理論的な学 (theoria) との対立から限定をこうむるものではないとあらためて強調する。というのも、理論的な学は、人間の生が有する可能性の広範な領域のなかからある種の最高の実践としてあらわれるのであり、それはむしろ、知にもとづく制作 (poiesis) にたいする限定としてあらわれる (VZW, 82)。このことに対応して実践哲学もまた、自由に選択する者の実践知と、アリストテレスがテクネーと呼ぶところの技術知とのあいだに成立する境界から規定されうる (VZW, 83)。ガダマーによれば、実践哲学は人間の卓越性をなすものにかかわるのであり、それゆえに、人間的実践としてのプロアイレシスという特徴を意識させるものとなっている (Ibid.)。行為を導く知は本質的に、行為として実現可能なことをじっさいに選択する具体的な状況においてはじめて必要とされるものである。たしかに実践哲学は、つねに変転する状況や行動様式にさまざま対応するかぎりではテクネーという専門知に近似してはいるものの、目的をもった制作のために能力に習熟し発揮するテクネーからは根本的に区別される (VZW, 84)。実践哲学が教示可能な知でありながら具体的な認識という性格をもつのは、この知が実践の具体的な状況そのものから繰り返したちあらわれながらも、認識へと一般に高められるような規範的意味や普遍性を携えて、実践に再帰しふたたび規定されることによるからなのである (VZW, 83)。

ガダマーは実践をめぐるこうした理解を、たんなる解釈や理解の技法論 (Kunstlehre) 以上のものとしての自身の解釈学に援用し、実践哲学との類縁性を指摘する (VZW, 84)。善

²⁶ 解釈学における理論と実践の相互関係を再考するにあたってアリストテレスへの回帰をうちだすガダマーの姿勢を、アリストテレスの友情概念に示される理論と実践との関連から指摘したものとして以下を参照。Walter Brogan, *Gadamer's Praise of Theory: Aristotle's Friend and the Reciprocity Between Theory and Practice*, *Research in Phenomenology*, Vol. 32, 2002, Brill, pp. 141-155.

き生活の教えとしての実践哲学の伝統が、生き生きとしたエートスのうちでその生を具体化することを前提にしているように（VZW, 89）、解釈学もまた、特殊な技巧的態度ではなく、テキストの言明と事柄にたいする理解の本質的な関係にかかわる普遍的な実践として、理論的関心と実践的行為との相互的な含みをもつことになる（VZW, 91）。アリストテレスはこのような理論と実践の相互性をフロネーシスという観点からじゅうぶんに認めていたとガダマーは指摘しつつ、理論、つまり「知ろうとする普遍的な意志（allgemeine Wissenwollen）」と具体的な実践的思慮との連関は協働的であると述べる（VZW, 108）²⁷。ガダマーにとって重要であるのは、解釈の実践にたいしてどのような理論的（theoretisch）態度をとりうるかということが自身の解釈学において問題となるとき、理解がもつ言語的性質こそが解釈学的経験の本質であることであった（VZW, 107）。つまり、言語をつうじて世界経験のうちに参与するとき、われわれはつねに言語的なパースペクティブにそくして自己形成を行ないながら世界をあらたに創造的に形成していく。ガダマーの解釈学における理論的な自覚と理解の実践は、言語をもつ者がそのつど言語にもたらされ現前化するものにたいしてテオリアというしかたで固有の距離をもって事柄にかかわるように、より理論的で普遍的な視点に向かいながらも、それを具体的な状況へと適用する実践を、学問として明確にしようとする試みであったといえるだろう。

おわりに

本発表では、ガダマーの解釈学的言語における視覚的なものの意義を、マーティン・ジェイの言説を手がかりとして、テオリアおよび反映性という観点から検討してきた。そこで明らかとなったのは、主観的な対象化ではなく事柄への純粋な参与と把握を可能にするテオリアが、芸術経験をはじめ言語的世界経験のモデルとして示されているとともに、有限な表現において無限の意味連関がもたらされる解釈学的出来事にたいする言語の媒介性が、反映というありかたから特徴づけられる思弁的な存在様式にもとづくということであった。さらに、存在や世界全体とのあらたな連関がたえず生起し事柄そのものの運動を媒介する言語は、テオリアとプラクシスの協働としての解釈学そのものの実践にかかわる次元へと展開されてなお、言語が組み込まれているそのつどの具体的な状況ごと新しい生成にかかわるその基盤から、解釈学そのものが学問的により普遍的な理論地平へとひらかれてゆく可能性を示すものとなっている。言語は有限な人間の存在および認識の様式そのものであるが、その有限性の克服もまた、普遍的な媒体として創造性を開示するまさに言語

²⁷ 「したがって、フロネーシスは、普遍的知識と個別的知識の両方をそなえていなければならない。あるいはむしろ、個別的知識のほうをいっそうそなえていなければならない。だが、この場合にも、何か「総括的なもの」が考えられるだろう」。Cf. *The Work of Aristotle*, translated into English under the editorship of W. D. Ross, Vol. IX, Oxford University Press, 1925, 1141b23（アリストテレス『ニコマコス倫理学』朴一功訳、京都大学学術出版会、2002年、273頁）。

それじたいを措いてほかにない。そのさい、ガダマーの議論に遍在するテオリアと反映性という観点から明らかになる視覚的な契機は、解釈学的な言語経験を支えるたしかな裏箔となっているのである。

【参考文献】

- Gadamer, Hans-Georg, *Gesammelte Werke 1: Hermeneutik I: Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999 (轡田収・巻田悦郎他訳『真理と方法 (I) , (II) , (III)』法政大学出版局、1986 年、2008 年、2012 年) .
- , *Gesammelte Werke 2: Hermeneutik II: Wahrheit und Methode: Ergänzungen*, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999.
- , *Gesammelte Werke 3: Neuere Philosophie I Hegel Husserl Heidegger*, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999.
- , *Gesammelte Werke 4: Neuere Philosophie II Problem Gestalten*, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1999.
- , *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1991 (Dritte Aufgabe) (本間謙二・座小田豊訳『科学の時代における理性』、法政大学出版局、1988 年) .
- Jay, Martin, *Downcast Eyes: The Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought*, University of California Press, 1993. (マーティン・ジェイ『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜 (新装版)』亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2024 年) .
- , *Force Fields: Between Intellectual History and Cultural Critique*, Routledge, 1993 (マーティン・ジェイ『力の場』今井道夫・吉田徹也・佐々木啓・富松保文訳、法政大学出版局、2024 年、1996 年) .
- Brogan, Walter, Gadamer's Praise of Theory: Aristotle's Friend and the Reciprocity Between Theory and Practice, *Research in Phenomenology* Vol. 32, 2002, Brill, pp. 141-155.
- Konchak, William, Gadamer's "Practice" of Theoria, *Epoché: A Journal for the History of Philosophy*, Vol. 24 (2), 2020, pp. 453-465.
- Liakos, David, Hermeneutics and the Conservatism of Listening, *Cosmos and History: The Journal*

of Natural and Social Philosophy, vol. 16, no. 2, 2020, pp.495-519.

Nightingale, Andrea Wilson, *Spectacles of Truth in Classical Greek Philosophy: Theoria in its Cultural Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004.

Ross. W. D., *The Work of Aristotle*, translated into English under the editorship of W. D. Ross, Vol. IX, Oxford University Press, 1925 (アリストテレス『ニコマコス倫理学』朴一功訳、京都大学学術出版会、2002年) .

ハンス＝ゲオルク・ガダマー『ヘーゲルの弁証法』山口誠一・高山守訳、未来社、1990年。

ハンス＝ゲオルク・ガダマー『健康の神秘』三浦國泰訳、法政大学出版局、2006年。

加國尚志・亀井大輔編著『視覚と間文化性』法政大学出版局、2023 年。